

国語

(2026)

- (注意事項)
- 1 問題文は27ページあります。
 - 2 解答は解答用紙の所定欄に記入してください。下書きは、問題冊子の余白を利用してください。ただし、回収はしませんので採点の対象とはなりません。
 - 3 解答はすべてマークセンス方式となっていますので、解答用紙の注意事項をよく読み解答してください。
 - 4 受験番号・氏名・フリガナは、監督者の指示に従って、解答用紙の所定欄に丁寧に記入してください。
 - 5 解答用紙にマークセンス方式の受験番号欄があります。受験番号をマークする際は濃く丁寧にぬってください。
 - 6 試験中に問題冊子の印刷不鮮明，ページ落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気づいた場合は，手を挙げて監督者に知らせてください。

一 次の文章を読んで、あとの設問に答えなさい。

子どものころから書店が好きで、出版社をはじめてからは、プライベートだけでなく、仕事でも本のある場所に足を運ぶようになった。

この一〇年、二〇年でたくさんの書店が閉店してしまったが、その代わりに、たくさんのあたらしい書店がオープンした。このシヨウジヨウルテ^(ア)はどこかで落ち着き、均衡するのではなく、これから先もずっと続くのだろう。

それは幼少のころのぼくが想像していたような二一世紀ではない。すくなくとも、そろそろ五〇歳を迎えようとしているぼくが、落ち着いて仕事に専念できるような、アンノン^(イ)とした未来ではない。

すべてが日進月歩^①で進み、等しく発展していくわけではない。ある日、あたらしいなにかがオープンし（あるいは発売され）、その何かがそれまで存在していたものを瞬時に色褪^あせて見せてしまうのだ。

書店を例にとれば、三〇〇坪の本屋さんのオープンは老舗の五〇坪の本屋さんを古く見せるだろう。同じように一〇〇〇坪の本屋さんのオープンは三〇〇坪の本屋さんを古く見せるはずだし、店の中央に大きなカフェを併設した本屋さんは、その一〇〇〇坪の本屋さんを前世紀の古いタイプの本屋さんに見せるかもしれない。

しかし、カフェを併設した本屋さんこそ書店のもっとも洗練された形だ、と思っていると、単行本しか並んでいないたった一〇坪の本屋さんこそがストイックで最新の本屋さんに見えたりもする。

本といわず、すべてのものはおそらくそのように進んでいくのであり、ものをつくったり、売ったりして生計を立てている身としては、その影響から逃れることはできない。

理想は、名著と呼ばれるべき本をずっと変わらぬペースで売り続けていくことだ。

けれど、その本は他社の魅力的な新刊によって、あつという間に色褪せてしまったり、あるいはその逆に、もう一度、輝きを取り戻したりする。

文章だって、それは同じであるはずだ。ぼくが若いころはそもそも、文章を書いて、だれかに発表する学生自体がすくなかったが（みな一様に恥ずかしがったのだ）、その学生たちは押し並べて村上春樹のような文章を書いた。その次の世代の人たちは、ぼくが知っている範囲でいえば、保坂和志のような文章を書き、江國香織のような文章を書いたのであり、その書かれる内容もまた、その作家たちのスタイルによって強く規定された。

村上春樹の文体をまねれば、当たり前だが、物語も、会話文も村上春樹風になるのであり、保坂和志の文体を模倣すれば、登場人物も、地の文

も、見えてくる風景さえも保坂和志ふうになる。

インターネットがあらゆる人々の生活に入り込んで、小説家志望の人や、文章を書くことが好きな人以外のたくさんの人が毎日、あらゆる文章を发表するようになった。

それが、ぼくが学生だった一九九〇年代後半と現在とを比べて、いちばん大きく変わったことだ。

文章を書くということは、決していいことばかりではないだろう。

たとえば、目の前の風景を見て、美しいと感じ、カメラないしはスマートフォンのシャッターを押すとする。文章というのはその写真であり、スマートフォンの中のデータであって、目の前の美しい風景ではない。さらにいえば、かつてのなつかしい記憶が往々にして一枚の写真に集約され、すり替えられてしまうように、文章もまた、本来は見えていたり、聞こえていたり、感じられていたりしたたくさんのことを、わずかな言葉と引き換えに忘却の底に深く沈めてしまう。

その意味でいえば、すぐれた文章とは、その忘却の底に沈んだ記憶をふたたび水面に引き上げるような文章のことをいうのかもしれないが、手垢にまみれた、^②紋切り型の文章もまた、書き手になにかを想起させることがあるはずだ。

思い浮かぶのは、^{〔注二〕}ハンナ・アーレントの『エルサレムのアイヒマン』の次のような一節だ。

判事たちは、被告がその生涯のいかなる時期についてもいかなる行為についても、そのそれぞれについて昂揚めいた紋切り型の文句を用意していることを知って腹立たしく思うとともに失望したのだった。終戦時にふさわしい「私は笑って墓穴に飛びこむであろう」という言葉と、「世界中の反ユダヤ主義への見せしめとして私は喜んで衆人の前で首を縊ろう」という言葉とは、彼の頭の中では矛盾していなかった。事態がまるつきり変わってしまった今、この「世界中の反ユダヤ主義への云々」という言葉は前者とまったく同じく、彼の心を昂揚させる機能を持っていたのである。

アドルフ・アイヒマンは「ゲシユタポ・ユダヤ人課課長」としてホロコーストにかかわり、一九六〇年に逃亡先のアルゼンチンで逮捕される。エルサレムに移送された彼が多くのユダヤ人の前で何を語るかは世界中の注目を集めたが、アイヒマンの口から語られたのは「昂揚めいた紋切り型の文句」だった。

アイヒマンがほんとうに、「私は笑って墓穴に飛びこむであろう」と自分の最期を予期し、「世界中の反ユダヤ主義への見せしめとして私は喜んで衆人の前で首を縊ろう」と考えていたのかは、だれにも知りようがない。

それよりも注意を払いたいのは、さまざまな紋切り型の文句が、彼の本来覚えているべきはずの記憶の代わりに彼の頭にストックされていたということであり、それらの文句が彼のこころを昂揚させたということだ。

ぼくはこの「昂揚」に覚えがある。それはぼくが顔の見えない誰かをいい負かそうとするときに決まってあらわれる、抑えられないこころの働きのようなものであり、目の前の具体的なだれかではなく、大多数の人たちに向けてなにかを発信しようと企んでいるときにあらわれる、こころの震えのようなものである。

なぜ、そんなにも昂揚するのはわからない。ぼくはインターネット回線の向こうにいるだれかと論争して興奮しているのだともいえるし、それはまったく違って、もしかしたら恍惚^{こうこつ}としているのかもしれない。

いずれにせよぼくは、我を忘れているのであり、ふだんの言葉とは違う、紋切り型の文句（インターネット・スラングのようなものだ）をつかって、相手を傷つけようとしたり、その逆に、みな衆目を集めようとしたりしている。

たいていの場合、我に返る。水を飲み、ハードディスクのなかの子どもたちの写真などを見て、パソコンに打ち込んでいる文章をデリートキーで削る。

でもまれに、そのままSNSや、ブログに投稿してしまうこともある。

そのとき、手のひらは汗がびっしょりで、しばらくは相手の反応が気になって、なにも手につかない。

学生のころ、こうした紋切り型の文句を小説に用いると、先生はそのことを指摘した。

そうした言葉をつかうこと自体がNGなのではない。気をつけなければならないのは、そのフレーズをつかうことで、登場人物の心情なり、挙措なり、風景なりといった描写が**おざなり**になってしまうことだ。

本来なら、対象を見つめ、あるいは意識を凝らして想像して書くところを、「絵に描いたように美しい」とか、「鋭い感性」とか、「深い話」などと書く。

たしかに、それで伝わることもあるし、コミュニケーションのスピードだけを念頭に置くのであれば、そうした、どうにでも受け取れるような表現を用いることが有用な場合もある。

けれど、そのような言葉をつかい続けることは、考えるという行為を、あるいは、思い出すという行為の出発点を誤らせる。

文章を書く前のほうが、あるいはその「紋切型の文句」を知らなかったときのほうがずっと豊かなイメージを胸に抱いていたのに、いくつかの便利な言葉と引き換えにそのイメージを失う。先に「文章を書くということは決していいことばかりではないだろう」と書いたのはそのような意味だ。

④書くことによつて見える世界や、考えられる世界が広がるのではなく、逆に、その世界が固定化し、均質化していく。

そうしたことは、文章を書いたり、意見を発したりすることのスピードと回数が重んじられる世界においてケンチョ(ウ)なのであり、ぼくの目には、言葉や表現が均質化されているからこそ、インターネットの世界はますます加速度を増し、参加者を増やしているように見える。

すくなくないひとが本が売れないという。ぼくもそれを実感するし、毎日山のような情報が朝から深夜までスマートフォン画面のなかを流れていく現代において、本というものの存在はひょつとしたら時代遅れなのかもしれないと思う。

本の企画を思いつき、それを作家に打ち明け、カイダク(エ)し、原稿を書いてもらう。そうして実際に本が印刷所で刷り上がるのは、どんなに早くても、最初に企画を思いつてから一年もあとのことだ。

それだけで商売をし、生計を立てていくということは、今後ますます難しくなるかもしれない。でも、ぼくは本というものが好きだし、もつといえ、本というものの存在を信頼している。

紙の本は、^(c)いわずもがなだが、一度刷り上がってしまったら、だれにも修正することができない。ぼくは未だにときどき、そのことを信じられないように思うことがあるが（すぐに修正したり、削除できたりするインターネットの世界を毎日見ているとなおさらだ）、たった一文字の誤植でさえ修正することのできないその特性は、不変性と言い換えることもできるのだ、とも思う。

（島田潤一郎『長い読書』より。一部改変・省略）

〔注一〕ハンナ・アーレント——ユダヤ系ドイツ人の政治哲学者（一九〇六—一九七五）。ナチスに追われて、フランスを経てアメリカに亡命した。

〔注二〕ゲシュタポ——ナチス・ドイツの秘密国家警察。

問一 傍線部(ア)～(エ)のカタカナに該当する漢字と同じ漢字を(傍線を付した部分の漢字表記に)含むものを、次の各群の選択肢①～④の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は(ア)――1、(イ)――2、(ウ)――3、(エ)――4。

(ア) ショウジョウルテン

1

- ① マラソン大会で四位でゴールしニュウシヨウを果たした
 ② 傷口を水道水でよくセンジョウしてから絆創膏を貼った
 ③ 大学生の息子にルスバンを頼んで夫婦で海外旅行に出かける
 ④ ぜんそくに苦しむ少女がテンチ療養のため北海道に滞在する

(イ) アンノン

2

- ① 相手が強硬姿勢に転じたため交渉はアンシヨウに乗り上げた
 ② 長年のケンアンであった鉄道と国道の立体交差が実現された
 ③ 高校の同窓会に出席して三〇年ぶりにオンシに再会した
 ④ 事を荒立てずオンビンに処理するのが彼のためにもよい

(ウ) ケンチヨ

3

- ① 大学でアラビア語を学ぶとは彼女にはセンケンの明がある
 ② 筆者の主張を讀者シヨケンはどのように思われるだろうか
 ③ この大学の図書館はチヨメイな建築家のB氏が設計した
 ④ 冬場に氷池で作られた天然氷は近くの氷室でチヨゾウされる

(エ)

カイ
ダ
ク

4

- ④ ③ ② ①
- 彼の説得力のある発言に対し異論を述べる人はカイムであった
次期社長候補の不倫を暴露するカイブンシヨが会社内に出回る
当方のお願ひに対するダクヒを一週間以内にお知らせください
大雨の降った後に川を見に行くとダクリユウが渦を巻いていた

問二 傍線部(a)～(c)の表現の言葉本来の意味と最も近いものを、次の各群の選択肢①～④の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は(a)―5、(b)―6、(c)―7。

(a) 押し並^なべて

5

- ① 競いあつて ② すべて一様に ③ 際立って ④ 強制されて

(b) おざなりになつてしまう

6

- ① 周りの影響を受けて個性を失つてしまう
② 手間をかけないで簡単に済ませてしまう
③ その場限りの間に合わせになつてしまう
④ あまり注意を払わずに軽く扱つてしまう

(c) いわずもがなだが

7

- ① ふさわしい言葉が見つからないが
② 誰でも知っていることだが
③ はなはだ本意ではあるが
④ わざわざ言う必要もないが

問三 傍線部①「日進月歩」と反対の意味の表現として最も適切なものを次の選択肢①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解

答番号は 8。

- ① 旧態依然 ② 温故知新 ③ 一期一会 ④ 雲外蒼天^{そう}

問四 傍線部②「紋切り型の文章」の説明として最も適切なものを次の選択肢①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は 9。

- ① 現実には起きないような過度に誇張された表現を使った文章
② 決まった型にはまっていて新鮮味のない表現を使った文章
③ ある物事を別のものにたとえる比喩的な表現を使った文章
④ 今までにあまり使われたことのない斬新な表現を使った文章

問五 傍線部③「こころの震え」とは、どのような心理状態を指した表現か。その説明として最も適切なものを次の選択肢①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は 10。

- ① 自分の言葉の素晴らしさに気づいた時の満足した心理状態
② 物事を客観的に見ながら相手を言い負かそうとする時の落ち着いた心理状態
③ 大勢の人に向かって言葉を伝えようとしている時の興奮した心理状態
④ 迷いながらも特定の相手を傷つけようとする時の後ろめたい心理状態

問六 傍線部④「書くことによって見える世界や、考えられる世界が広がるのではなく、逆に、その世界が固定化し、均質化していく」とは、どういうことか。その説明として最も適切なものを次の選択肢①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は 11。

① 書くことに慣れてくると、人と同じ表現を用いる方が関心を集められるとわかって、自分独自の表現がなくなり、見える世界も限定されていくということ。

② 均質化された言葉や表現を用いて書くと、対象に意識を集中してそのイメージを丁寧に表現するという作業が省かれ、世界の見方やものの考え方から多様性や柔軟性が失われるということ。

③ 現代のように情報を発信するスピードが重視されるようになると、人の言っていることを引用して済ませてしまうことが多くなり、誰もが生通った考え方をするようになっていくということ。

④ 文章を書く機会が増えると、自分の身の回りで起こる小さな出来事を題材にすることが多くなり、広い世界を見て心を動かされる機会が少なくなっていくということ。

問七 次のア～オについて、問題文の論旨と整合するものには①、そうでないものには②を、それぞれマークしなさい。解答番号はア～

12

、イ

13

、ウ

14

、エ

15

、オ

16。

ア インターネットの世界では、紋切り型の表現が多用されている。

イ 物事を文章で書き記すことには、その記憶を忠実に残す作用がある。

ウ 紋切り型の表現を使って大勢の人々に向けて発信することは、独特の昂揚感を伴う。

エ 紙の本は最新の情報を伝えることはできないが、その不変性という特性には価値がある。

オ 筆者は学生のころ、紋切り型の文句を小説に用いることを禁じられていた。

(下書き用紙)

国語の試験問題は次に続く。

二 次の文章を読んで、あとの設問に答えなさい。

ヨーロッパで、歴史を、古代、中世、近代という三つの時代にわけける区分（「三時代区分」）は、一七世紀末、ケラリウスという学者が『古代史』『中世史』『近代史』という本を出したことから広まったと言われています。ここでは、こうした大枠の時代区分を共有していた一九世紀のヨーロッパ人、レオポルト・フォン・ランケと、カール・マルクス、フリードリヒ・エンゲルスを例に、「中世」の終わり、「近代」の始まりについてその考え方を見てみたいと思います。

「歴史学の祖」とも呼ばれるランケは、歴史を、神の意志の産物と考えており、また、神の意志そのものは知ることができないと考えていました。ランケにとって重要だったのは、歴史を貫く法則を見出すことではなく（それは神の意志なので知りようがない領域に属するからです）、歴史上のそれぞれの時代、それぞれの国家の個性を明らかにしてゆくことでした。

そうしたランケの立場からすれば、ある時代が特別な意味を持っているということはありません。特別な意味というのは、たとえば、時代を追うごとに人類は進歩しており、その最後の時代——つまり歴史家その人が生きている時代——は、進歩の最先端にいるのだ、というような考え方です。こうした考え方をとると、「先行する時代はただ後続する時代のウンパン者^(ア)にすぎない」ものになってしまい、「神の不公平」が生じてしまうからです。それゆえランケは、時代区分に関して、「^aそれぞれの時代は神と直に接している」という考え方をとり、どの時代がすぐれているとか劣っているとかいう考え方をしませんでした。

ランケの実際の作品を見てみましょう。主著の一つである『宗教改革時代のドイツ史』は、文字通り「宗教改革時代」としてランケが括った一つの時代を扱っており、一四八六年のマクシミリアン一世の即位を始点としています。その本論の始まりの部分には次のようなことが書かれています。

中世のさまざまな所産は、いたるところで互いに戦いつつ、その結果、共倒れになったように見えるといつてよいであろう。……（中略）……人間社会の根底にあるもろもろの理念は、それを生み出した神的にして永遠なるものを、部分的にまた不完全にしか含んでいないからである。……（中略）……地上におけるどんな存在も純粹で完全な存在とはなりえない。したがって永遠にして不滅なものは何ひとつないわけである。

ランケは、「宗教改革の時代」が、「中世」の終わりにあらわれたという時代区分の認識を持っていることがわかります。中世の終わりには、中世の世界を構成していた諸要素が共倒れになって新しい時代がやってくるという見解が示されていますが、それは別に「X」といったものと結びつけられているのではなく、どの時代であっても、時代を構成する要素は、神の視点からみれば不完全なものでしかなく、いつか滅びてゆくほかないものだからだ、とされるわけです。このように、ランケの歴史学においては、時代区分そのものはなされるのですが、その時代区分が何か重大な意味を帯びることはない、ということになります。もし意味があったとしても、神ならぬ人間にはそれは知り得ぬことで、歴史家にできることは、その時代の個性を淡々と描き出してゆくことだけだ、ということになるでしょう。そして、その時代の社会に大きな影響を与えることができる君主や政治家たちは、神によって与えられたそれぞれの時代の個性を代表する人物であると考えられ、君主や政治家によって支配される人びとの経済活動や生活は重要視されませんでした。

支配―被支配の関係を、「上から」とか「下から」とか表現するのは比喩に過ぎないのですが、ランケの場合、文字通り天上の神に歴史叙述の最終的な動因を置いているために、^b歴史叙述も「上から」のものとなるわけです。歴史家ピーター・ゲイは、ランケの叙述スタイルを検討した書物のなかで、このことを「ランケの体系からいえば、^{〔注二〕}ビスマルクは、明きらか（送り仮名は原文のまま）に、ベーベル（引用者注…ドイツ社会民主党の指導者、労働者出身）よりYに近かったのである」と述べています。

「この世界に永遠に存在するものなど何もない」といった考え方は、史料にもとづいて導き出されているわけではありません。史料にもとづいた歴史研究を重視したランケであっても、彼をとりまいていたルター派キリスト教という環境に由来する、彼なりの「歴史についての考え方」を使いながら、史料から読み取ったことがらを配置し、歴史書を書いていることがわかります。

ランケと対照的な歴史理解を示したのが、ランケより二三歳若く、同じくドイツに生を受けたカール・マルクスでした。マルクスはかならずしも歴史家というわけではありませんが、彼の哲学や経済学は、彼なりの歴史についての考え方とセットで構築されたもので、その考え方は後世の歴史家に大きな影響を与えました。

マルクスと、彼の盟友^cであるフリードリヒ・エンゲルスが一八四八年に発表した『共産党宣言』は、文字通り共産主義運動のシシン⁽¹⁾を示すために書かれたものですが、そのなかでは、共産主義運動の発生の必然性を、歴史を用いて示すことがおこなわれています。

『宣言』の第一章「ブルジョアとプロレタリア」は次のように書き始められています（傍線と番号は引用者による）。

今日までのあらゆる社会の歴史は、階級闘争の歴史である。

①自由民と奴隷、都市貴族と平民、領主と農奴、ギルドの親方と職人、要するに②圧制者と被圧制者はつねにたがいに対立して、ときには暗々のうちに、ときには公然と、不断の闘争をおこなってきた。この闘争はいつも、③全社会の革命的改造をもって終るか、そうでないときには相闘う階級の共倒れをもって終った。

マルクスとエンゲルスは、社会をさまざまな「階級」によって形作られるものとしてとらえます。階級とは、土地や労働用具などをだれがどのよう^uに所有し、生産物がどのように分配されるのかによって区分けされる人間の集団のことです。つまり、「階級」は経済的な位置によって決定される^uものです。

マルクスとエンゲルスはここで、傍線部①のような「階級」の例を挙げていますが、「自由民と奴隷」「都市貴族と平民」という階級はいわゆる古代ギリシア・ローマの社会を念頭に挙げられている例です。同様に、「領主と農奴」「ギルドの親方と職人」はいわゆる中世ヨーロッパの社会をイメージして書かれています。これらの階級は対等なわけではなく、どちらかがどちらかを支配し、サクシユ^uする関係にあります。これが傍線部②の「圧制者と被圧制者」、つまり支配階級と被支配階級です。

そして、すべての歴史は階級闘争の歴史だというわけですから、マルクス主義的な歴史理解をとる場合、支配階級と被支配階級の片方だけを取りあげただけでは歴史は書けないことになります。ランケ史学との大きな相違はまずこの点にあります。支配階級の一員である君主や政治家たちの行動を描いていくのでは歴史として不十分で、支配階級と被支配階級の関係が書かれなくてはなりません。傍線部③にあるように、一つの時代が「全社会の革命的改造」によって終わることもある、ということは、被支配階級が、支配階級を打ち倒し、あらたな社会をつくることもあるということです。つまり、そうなる^dとします、被支配階級の状態や行動が分析対象とされる必要が生じます。つまり、ランケ史学と異なり、「下から」の歴史が必要とされるのです。

マルクスとエンゲルスは、かれら自身が生きている一九世紀ヨーロッパを、「近代ブルジョア社会」と表現しています。ブルジョア、すなわち資本家が支配階級となり、労働者階級を支配する社会です。

そういうわけで、一九世紀ヨーロッパも階級社会であるという点ではこれまでの社会と変わらないのですが、彼らは、この「近代ブルジョア社会」に特別な意味を見出します。ここが、どの時代も神のもとで等しく価値を持つと考えたランケの時代観との大きな違いです。ふたたびマルクス

とエンゲルスの述べるところを聞いてみましょう。

しかしわれわれの時代、すなわちブルジョア階級の時代は、階級対立を単純にしたという特徴をもっている。全社会は、敵対する二大陣営、たがいに直接に対立する二大階級——ブルジョア階級とプロレタリア階級に、だんだんとわかれていく。

これまでの社会にはいろいろな階級が存在しえたのに対し、近代ブルジョア社会では「ブルジョア」（資本家）と「プロレタリア」（労働者）の二つの階級のみが存在します。工場制工業のもとでは、すべての生産手段を資本家が所有し、労働者は、何も持たずに工場に行って、そこで資本家が所有する機械と原料を使ってモノを生産し、賃金を受け取るだけです。

マルクスとエンゲルスは、こうした「近代ブルジョア社会」は、過去のさまざまな階級社会の、最後に来る時代だと考えました。すべてを所有する資本家と、何も所有しない労働者からなる社会で、被支配階級である労働者が資本家を打ち倒してしまえば、およそ階級というものは消滅してしまいます。「プロレタリアは、革命においてくさりのほか失うべきものをもたない。彼らがカクトクするものは世界である。万国のプロレタリア団結せよ！」（『共産党宣言』の末尾の部分）というわけです。

このように、階級社会の歴史の最後の時代である近代は、マルクス主義においては特別な意味を付与されているのです。

ランケにとって、中世が終わり、宗教改革の時代がはじまったことは、それ自体喜ぶべきことでも悲しむべきことでもありませんでした。なにしろそれはすべて神の意志なのです。「それが本来どのようなものであったか」という、後年やや独り歩きした観のあるランケの言葉は、人間には、神が造った歴史をつぶさに見ることしかできないし、それこそが神に仕える道なのだという信仰に立脚していたのです。

一方、マルクスやエンゲルスは神を信じていませんし、それどころか、共産主義者として、資本主義社会に代わる社会を自分たちの手で作ろう、つまり革命を起こそうとしていました。そのような立場から、自分たちの生きている近代、すなわち資本主義社会はどのような社会なのか、自分たちの価値判断を示す必要がありました。

（松沢裕作『歴史学はこう考える』より。一部改変・省略）

〔注一〕ビスマルク——オットー・フォン・ビスマルク（一八一五—一八九八）。プロイセンの貴族出身の政治家で、プロイセン首相として富国強

兵策を推進し、オーストリアおよびフランスとの戦争に相次いで勝利してドイツ統一を成し遂げ、ドイツ帝国の初代宰相となった。また、社会主義者鎮圧法を制定してベーベルらの社会主義・労働者勢力を弾圧した。

〔注二〕ギルド——中世ヨーロッパの都市で発達した商工業者の同業者組合。

問一 傍線部(ア)～(エ)のカタカナに該当する漢字と同じ漢字を(傍線を付した部分の漢字表記に)含むものを、次の各群の選択肢①～④の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は(ア)――17、(イ)――18、(ウ)――19、(エ)――20。

(ア) ウンパン

17

- ① 自主制作した雑誌を文化祭でハンブする
- ② 広くいろいろな方面に用いることのできる性質をハンヨウ性という
- ③ ショハンの事情により音楽会を中止する
- ④ 事故の負傷者を救急車で病院にハンソウする

(イ) シシン

18

- ① 住宅販売件数の増加は景気回復をシサしている
- ② 彼女は日本クツシの女子サッカー選手だ
- ③ 新幹線のエンシン計画に地元自治体が反対する
- ④ シンキョウの自由は憲法で保障されている

(ウ)

サクシユ

19

- ① 読めない漢字は漢和辞典の部首サクインで探すとよい
② 酪農家が一日二回のサクニユウ作業を手際よくおこなう
③ 家の前の道を毎日掃除するとはシユシヨウな心がけだ
④ あの劇団の舞台はシユコウを凝らした演出で評価が高い

(エ)

カクトク

20

- ① 火山活動により短時間で大きなチカクヘンドウが生じた
② 力士などの相撲すもうの関係者からなる社会をカクカイという
③ 母親がキトクとの知らせを受けて彼は病院に駆けつけた
④ 提案に反対する人にトクシンが行くまで丁寧に説明した

問二 傍線部a「『それぞれの時代は神と直に接している』という考え方」の説明として最も適切なものを次の選択肢①～④の中から一つ選び、

その番号をマークしなさい。解答番号は

21。

- ① どの時代にもその時代に特有の神に対する信仰の形があるという考え方
② 歴史家の眼からはどの時代からも神の定めた歴史法則が見て取れるという考え方
③ どの時代の個性も等しく神の意志によって与えられたものであるという考え方
④ 神の気まぐれな意志によって人類の歴史は現在に至るまで変化し続けているという考え方

問三 空欄

X

・ Y

にあてはまる語として最も適切なものを、次の選択肢①～④の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号をマークしなさい。解答番号はX― 22、Y― 23。

X

22

① 個性

② 進歩

③ 変革

④ 価値

Y

23

① 神

② 理想

③ 永遠

④ 夢

問四

傍線部b「歴史叙述も『上から』のものとなる」とあるが、「上から」に^{かきかっこ}鉤括弧が付されているのはどうか。その説明として最も適切なものを次の選択肢①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は 24。

① ランケが著書の中で用いた（鉤括弧のない）「上から」という表現を、本文の著者が引用したものであることを示すため、引用者によって鉤括弧が付されている。

② もともと、歴史叙述において君主や政治家の事績に注目することを「上から」と表現するが、ランケの考えでは、歴史叙述は、君主や政治家の事績を通じて、さらに上位に立つ神の意志を明らかにする作業であるので、強調のために鉤括弧が付されている。

③ 支配者である君主や政治家の事績に注目することを上から下への方向にたとえると同時に、天上に位置する神の意志の産物としての歴史を叙述したものであるという意味も重ね合わせて、鉤括弧付きの「上から」という表現を用いている。

④ ランケの考え方によれば、歴史家の使命は史料を客観的に分析して各時代の個性を叙述することであるので、あたかも天上に位置する神のようにすべての史料を見渡すという歴史家の取るべき姿勢を指して、比喩的に鉤括弧付きの「上から」という表現を用いている。

問五

傍線部c「盟友」の言葉本来の意味と最も近いものを次の選択肢①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は 25。

① かたい約束を結んだ友人

② 若い時からの友人

③ 秘密を打ち明けあった友人

④ 共通の敵とたたかう友人

問六 傍線部d「ランケ史学と異なり、『下から』の歴史が必要とされる」とあるが、それはどうしてか。その理由として最も適切なものを次の選択肢①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は 26。

- ① 革命による社会改造を可能にするためには、被支配階級の人々の団結を強めるような内容を中心にした歴史叙述が不可欠だから。
- ② 君主や政治家は階級対立を超越した存在なので、それらの者たちに注目して歴史を書いたのでは階級闘争の構造を正しく分析できないから。

- ③ 神を信じないマルクスとエンゲルスにとって、歴史は天上の神ではなく地上の人間たちの意志によって作られるものであったから。
- ④ 支配階級と被支配階級の間の階級闘争を描くうえで、被支配階級の状態や行動を明らかにすることが不可欠だから。

問七 傍線部e「特別な意味」とは、どのような意味か。その説明として最も適切なものを次の選択肢①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は 27。

- ① 資本家と労働者という、支配・被支配の関係を伴わない新たな階級の対立によって特徴づけられる時代としての意味。
- ② 政治的平等が実現した結果、過去のどの時代にも見られた資本家と労働者の対立構造だけが残った、最も単純な階級社会の時代としての意味。

- ③ 世界中の被支配階級が国境を越えて連帯し、支配階級を打倒することによって資本主義社会を完成させる時代としての意味。
- ④ 歴史上最も単純化された階級対立が見られる時代であるとともに、その時代の終結により階級社会が世界から消滅するという意味。

問八 本文の論旨と整合しないものを次の選択肢①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は

28

- ① ランケは、歴史上の各時代の個性は君主や有力な政治家の事績によって示されると考えていた。
- ② ランケは、歴史上のどの時代もそれぞれに神の理想とする世界の姿を示していると考えていた。
- ③ マルクスとエンゲルスは、近代ブルジョア社会を革命によって終わらせれば階級のない社会が実現すると考えていた。
- ④ マルクスとエンゲルスは、被支配階級の状態や行動を分析しなければ階級闘争の歴史は叙述できないと考えていた。

(下書き用紙)

国語の試験問題は次に続く。

三 次の文章を読んで、あとの設問に答えなさい。

さて、「高級レストラン」での経験といわれても、あなたはなにを思い浮かべていいかわからずに戸惑っているかもしれない。まず、ピエール・ブルデューの『ディスタンクシオン』からいくつかの引用を試みることにしよう。この有名な社会学者の大著には、そこで生じるだろう三つの異なる経験がくつきりと描き分けられている。

第一の経験は以下のようなものだ。

ゆとり^①というのは、他者の客観化する視線にたいする一種の無関心であって、その視線の力を骨抜きにしてしまう。それはこうした他者による客観化をさらに客観化することができるのだという確信、他者による所有化を逆に自分のものとして所有化することができるので、自分の身体の統覚規範を他者にも押しつけることができるのだという確信、要するにあらゆる力……を、自分は備えているのだという確信——そうした確信が与えてくれる自信というものを、前提としている。

ここでいわれているのはこういう経験だ。レストランに入る。そこには、ウェイターや他の客などさまざまな他者がいて、私のことを見る。しかし、私はそのまなざしなど気にならない。なぜか。私はここでのふるまい方（マナーとかエチケットと呼ばれるもの）を身につけている。私は落ちついて、私のほうから他の客を、ウェイターを見る。私のやり方が正しいのだ。私は他者の視線を撥ねつけ、むしろ他者のほうにふるまい方をわきまえた者の視線を押しつける。——この経験をブルデューにならって「ゆとり」と呼んでおこう。

これに対して、ちょうど正反対にある第二の経験は、次のようなものだろう。

飲み食いのしかたというのはおそらく、庶民階級がはっきりと正統的な処世術に対立する数少ない領域のひとつであろう。……農民層、そしてとくに生産労働者は、楽しい生活というモラルを対置する。生活を楽しむ人というのは、単によく食べよく飲むのが好きな人のことだけではない。それはあけっぴろげで打ち解けた関係、……そこでは仲間にはいたり無造作に振舞ったりするのを拒否することで相手との距離を示すような節度・ためらい・遠慮などが完全に消えてしまう関係、そういった関係にはいつてゆくすべを知っている人のことなのである。

たまたま入ったこのレストランにはなにか a 雰囲気がある。でも、ここもごはんを食べるところにかわりないよね。まわりの客は「氣取った食べ方」(節度・ためらい・遠慮に溢れた)をしているみたいだが、そんなのおいしくないし馬鹿げたやり方だ。ふだんどおり楽しく食べたほうがずっとうまい。みんなでわいわいやろう！——この人々は無造作に打ち解けた食事を楽しむ。この経験は、この場所にふさわしいマナーを知らないか、それに意味を認めないときに可能になる。そして、ここには、第一の経験とは対照的でありながら、結果としてよく似た他者の視線への無関心が存在する。これを、ここでは、「無視」と呼ぶことにしよう。

しかし、このふたつのどちらとも異なる経験も存在する。ブルデューが描く第三の経験は(じつは第一の文章の直前の部分からの引用なのだが)、次のようなものだ。

別にそれがブチブルの専有物というわけではないのだが、社会界のブチブルの経験とは何よりもまず氣後れである。すなわち自分の身体および自分の言葉にたいしてどこか居心地の悪さを感じ、それらと一体をなすのではなく、自分の言動に氣を配り、自分の振る舞いをあらため、言葉を訂正したりしながら、いわば外側から他人の目でそれらを観察している者、そして疎外された対他存在を回復(再所有化)するために絶望的な試みを行いながら、その修正の行き過ぎと不器用さによってはからずも自らをロティ⁽⁷⁾してしまい、まさに他者による自分の身体や言葉の所有化にきっかけを与えてしまうような者、そんな者の抱く困惑である。

レストランに入った。ウェイターが私を見ている。どう話せばいいのだろう。他の客も見ているような氣がする。この場所にふさわしいふるまい方を、私は一通り勉強してきたつもりだ。まちがっているのだろうか。だったら直して正しいやり方をしなくては。でも、どうしてもぎこちなくなってしまう。やっぱり見られているみたいだ。きちんとしなくては！——ブルデューがじつにテキカクに「氣後れ」と呼ぶこの態度は、どうしても「居心地の悪さ」を感じ「他者の客観化する視線」に敏感になってしまう経験、そこから正しいやり方をしようとしてかえって「修正の行き過ぎと不器用さ」を見せてしまい、また他者の視線の b になってしまう、そんな経験である。さて、この三つのうち、あなたの経験はどれに近いだろうか？

どうやら、ここには「リスベクタブルなもの」、つまり「礼になつたふるまい」や「きちんとした人であること」に対する、三つの異なる距離の取り方があるといえるだろう。「リスベクタビリティ」に対する「ゆとり」か、「無視」か、それとも「氣後れ」か。——まず、あなたにとって馴

染みの経験がどれかを思い出して、あなた自身と「リスベクタビリティ」との関係を確認してほしい。どうだろう。さて、もう少しブルデューの議論をなぞってから、少しずつ、その「病」について論じていくことにしよう。

ブルデューがこうしたビザイナ描写をする文脈について述べておこう。これまでの引用にもあったが、彼は、この異なる経験が、その人がどの「階級」に属するかに由来すると考えているようだ。「ゆとり」は（直接引用にはなかったが）「支配階級」——彼は実業家、上級管理職、教授、上級技術者、芸術家などをここに分類する——、「無視」は「庶民階級」——農業労働者や生産労働者、家事使用人など——の経験するものであり、「気後れ」はこの「中間」において、「プチブル」や「中間階級」と呼ばれる人々——職人、小商人、事務労働者、一般管理職・技術職、教員など——に見られる経験、というのだ。

フランス社会の観察に基づくこの議論は、もしかしたら、日本社会には縁遠いと感じられるかもしれない。彼は、この三つのグループの間に、次のような所有する資源の差が存在するという。ひとつは「経済資本」、つまりお金を所有するかどうか。第二に「文化資本」、教養やふるまい方など身につけた文化（これは学校で成功するために重要な資源である）がどれほどあるか。第三に「社会関係資本」、どのような人との関係・つきあいをもっているか。「階級」を論じるときに多くとられてきた「経済資本」にかえて、彼は、これら資本の総量と構造を考えないと「階級」を描きえないと考える。——しかし、フランスなどの西欧社会と比べて日本ではこれらに決定的な差はなく、差があってもどう境界線を引けばいいかわからず、必ずしも有効な議論ではないと感じる人も多いかもしれない。

しかし、次のような三つの「位置」に由来する異なる「経験」に焦点を置き直せば、ブルデューが描きだす「階級」の論理、それぞれが属する「位置」から個々人にかかってくる「力」は、私たちの世界にも発見されるように私は感じる。ある人々は「資本」をすでに与えられている。たとえば、レストランでのマナーを子どものときから身につけ、これが「正統な文化」だとの確信をもっている。そのふるまいをなにげなく繰り返しながら、それを身につけていない人々を見て、自分たちは彼らと違うという「卓越化の感覚」をもち「ゆとり」を経験する。別のある人々は「資本」をあまり与えられていない。彼らは、他の人々にとって「正統な文化」とされるものを身につけてはいないし、もしかしたら知りもしない。そして、そのやり方に意味を感じないか、それを試みるだけの資源（機会やお金）を持たず、むしろそれを無駄で「馬鹿げたもの」と感じる（感じざるをえない・感じるができる）。^④ 彼らは「必要なものの選択」を基調として生活を組み立てていく。一方に「正統な文化」を身につけた人々、他方に「正統な文化」から疎外され、自由である人々が、私たちの社会にも存在するといつて、それほどまちがってはいないだろう。

そして、このふたつの「中間」に位置する人々——「中間階級」——の経験も、私たちはよく知っているだろう。彼らは「支配階級」ほど「資

本」を持っていない。たとえばマナーを十分には身につけていない。しかし「庶民階級」ほど「資本」を持たないわけでもない。彼らは、マナーのことを知る機会をもち、身につける試みをするお金もある。つまり、「正統な文化」は「馬鹿げたもの」ではなく、望まれるもの、手に入れたいものなのだ。彼らは「正統な文化」を手に入れる、「自由」を持っている。しかし「正統な文化」を手に入れない、「自由」（「庶民階級」が持つような）は持っていない。「気後れ」とは、そのような位置——「中間」つまり「プチブルの位置それ自体」——が、そこにいる人に「力」を及ぼして生まれる、独特の経験のことである。

社会には三つの位置が存在する。「リスペクタビリティ」を知っているし、身につけている位置。「リスペクタビリティ」を身につけていないし、知りもしない位置。そして、「リスペクタビリティ」を知っているが、身につけていない位置——私たちの社会にもこうした三つの「位置」があり、それぞれで「リスペクタビリティ」に対する経験は決定的に異なるであろう。

（奥村隆『他者という技法——コミュニケーションの社会学』より。一部改変・省略）

〔注〕プチブル——小ブルジョア、小市民。資本家と労働者の中間に位置する、中程度の私有財産・知識・技能をもつ者。

問一 傍線部(ア)～(ウ)のカタカナに該当する漢字と同じ漢字を（傍線を付した部分の漢字表記に）含むものを、次の各群の選択肢①～④の中から

それぞれ一つずつ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は(ア)—— 29、(イ)—— 30、(ウ)—— 31。

- (ア) ロテイ
- | | |
|--|--|
| 29 | <div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 45%;"> <p>① 自宅のリビングにダンロを設置した</p> <p>② 市長はワイロを受け取った疑いで逮捕された</p> <p>③ 上司の退職祝いに花束をゾウテイした</p> <p>④ 港のそばにはボウハテイがある</p> </div> <div style="width: 5%; text-align: center;"> <p>①</p> <p>②</p> <p>③</p> <p>④</p> </div> <div style="width: 45%;"> </div> </div> |
|--|--|

(イ)

テキカク

30

- ① 長時間の手術で悪性腫瘍をテキシユツする
- ② 警察署から金品を盗むとはダイタンフテキな犯行だ
- ③ 貧困問題のカクシンに迫る報道番組を制作する
- ④ 台風襲来に備えて数日分の食料をカクホした

(ウ)

ビサイ

31

- ① この地域では近年産業がスイビして人口が減った
- ② 報告によれば今回の作戦行動のシユビは上々だ
- ③ この薬には強力なサイミン作用がある
- ④ 残されたコンクリートの基礎部分をハサイした

問二 空欄

a

・ b

にあてはまる語として最も適切なものを、次の選択肢①～④の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号

をマークしなさい。解答番号は a― 32、b― 33。

a

b

32

33

- ① 謎めいた
- ② 取り繕った
- ③ すさんだ
- ④ 取り澄ました
- ① 遮蔽物
- ② 虜とりこ
- ③ 主ぬし
- ④ 反射

問三 傍線部①「他者による客観化をさらに客観化することができる」とはどういうことか。その説明として最も適切なものを次の選択肢①～

④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は 34。

① 他者から物のように扱われても、自分が他者を物のようにみなせば我慢できるということ。

② 他者の視線に気づいても、その他者を冷静に分析し、自分のふるまいをよりふさわしいものとして正当化できるということ。

③ 他者の視線を好意的に受け止め、肯定的に理解できるということ。

④ 自分のふるまい方には無関心なために、むしろ他者のふるまい方に常に関心を向けることができるということ。

問四 傍線部②「私はそのまなざしなど気にならない」とあるが、この表現に関する説明として最も適切なものを次の選択肢①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は 35。

① この表現は、有名な社会学者（ブルデュー氏）が高級レストランで自信を持ってふるまうことができ、他の客がどのように思おうと気にすることなく食事できたことを述べている。

② この表現は、本文の筆者（奥村隆氏）がある高級レストランに入ったときの体験を語っており、筆者はマナーやエチケットに通じていたので何ら動揺することなく食事できたことを述べている。

③ この表現中の「私」は本文冒頭にある「あなた」すなわち本文の読み手を示しており、読み手である「あなた」自身による高級レストラン体験の一つのケースを想像している。

④ この表現中の「私」はまったく不特定の、およそ人というものの一般を意味しており、ふつうレストランでは、他人の目を気にすることなく食事ができることを示している。

問五 傍線部③「疎外された対他存在を回復〔再所有化〕する」とはどういうことか。その説明として最も適切なものを次の選択肢①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は 36。

- ① 他者によって押し付けられた評価尺度から自分を解放し、自分のふるまい方に自信を持つということ。
- ② 自分が集団の中で浮いていると感じ、集団のやり方に合わせて自分のふるまい方を変えということ。
- ③ 自分が気後れしていることを周囲の人々に知られないように、慎重にふるまおうということ。
- ④ その場に合ったふるまい方を他者に教えられて、自分のふるまいを改めるということ。

問六 傍線部④「『正統な文化』から疎外され、自由である人々」とは、どのような人々を指しているか。その説明として最も適切なものを次の選択肢①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は 37。

- ① 「正統な文化」にあこがれる一方で、それを身につけなくても仲間と打ち解けて楽しく生活する術を知っている人々。
- ② 「正統な文化」を身につけていないために「気後れ」を感じ、努力の結果それらを身につけ自由を得た人々。
- ③ 「正統な文化」に接する機会が乏しいが、それに価値を認めないため「正統な文化」を追い求める必要のない人々。
- ④ 「正統な文化」を子どものときから身につけているため、「正統な文化」の存在をそもそも意識する必要のない人々。

問七 本文の論旨と整合しないものを次の選択肢①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は 38。

- ① 「中間階級」は他人の視線に対して敏感で、自分が正しいふるまいをしているか気になり、「気後れ」を感じる傾向が強い。
- ② レストランでのマナーという「文化資本」を与えられている人々は、高級レストランで「ゆとり」を経験することができる。
- ③ 「庶民階級」は「文化資本」を与えられていないけれども、「リスベクトブルなもの」に対して「気後れ」することがない。
- ④ 「経済資本」・「文化資本」・「社会関係資本」のいずれについても、日本社会には西欧社会と同様の「階級」間格差が存在する。